

駒宮神社

現在の宮崎県は、少なくとも奈良時代（710～794 年）に、僻地だったこの地域の馬が、朝廷に珍重されてから、馬の飼育が盛んです。その歴史が息づいているのが、駒宮、つまり「馬の神社」であり、境内には馬の像が数多くあります。古くからの海岸線にあるこの神社の敷地は、太古の昔から聖地として信仰されており、現在の社殿の裏手にある崖を神の住処として人々が崇拝していたのではないかと考えられています。海が後退した後、周辺の土地は農耕や放牧に利用され、駒宮神社は農耕民族の信仰の中心地となりました。

江戸時代には、飢肥藩の大名である伊東家（現在の宮崎県南部沿岸部）が信仰と庇護の象徴として毎年馬を寄進していたことから、駒宮は保護されていました。現在の駒宮神社は、神話上の初代天皇である神武を祀っています。神武天皇はここで幼少期を過ごしたと言われており、特に特に 1868 年の明治維新以降に強調された側面です。明治天皇（1852～1912 年）の政府は、神道を国教として制度化し、皇室の起源に関する土着の神話や伝説に関連した場所の崇拝と維持を奨励しました。